

---

# お歯黒べったり

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お歯黒べつたり

### 【Nコード】

N8419F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

夜の神社に姿を現わす歯の黒いのつぺらぼうみたいな妖怪。この妖怪の正体と退ける方法とは。この妖怪を退ける方法はこの小説にある通りだったりします。

## 第一章

お齒黒べったり

近頃街の神社で怖い噂があった。どうも化け物が出るといふのだ。

「目も鼻もなくてさ」

「それで江戸時代の女の服を着ていて」

こうした話はどうしても直接の目撃者がいないものであるが今回は違っていた。何と本当にいて真顔で皆に対して説明をするのである。

「お嫁さんの服を着ていてさ」

「それで夜の神社の前に出て来るんだよ」

見た人達が口々に言うのである。

「別に何かするわけじゃないけれどさ」

「それが怖い何のって」

「のっぺらぼう?」

皆目も鼻もないと聞いてまずはこの妖怪のことを思った。

「ひよっとしてそれって」

「まさかあれ?」

「いや、ちよっと待ってよ」

だがここで何故か妖怪に詳しい奴が言うのだった。

「多分それのっぺらぼうじゃないよ」

「違うの?」

「多分ね」

そして皆にも言うのである。

「違うよ、それ」

「じゃあ何なの?」

「お嫁さんの服着て目がないって」

「何なのよ」

「その妖怪ってさ」

眼鏡をかけた彼はその妖怪を見たっていう女の子に対して直接問うのだった。

「眉、どうなってたの？」

「眉！？確か」

問われた彼女はここで己の記憶を辿る。

「そういえばなかったわね」

「そう、なかったの」

「眉なかったわよね」

「ああ、なかったよ」

「そういえばそうだったわね」

「なあ」

他に見た面々も同じことを証言する。つまり誰が見ても眉はなかったのである。

「そうそう、それでさ」

「歯だよね」

「そう、歯」

彼等は自然に歯について話をはじめた。何故かその表情が嫌悪感に満ちたものになっていた。

「歯が真っ黒だったわよね」

「あれが凄く気持ち悪いし」

「何なんだよ」

「さあ」

その話をするのであった。

「あの真っ黒い歯って」

「何か塗ってるのかしら」

「ああ、歯が真っ黒なんだ」

眼鏡の妖怪博士はここまで聞いて頷く顔をするのだった。

「歯は真っ黒だったんだね」

「ええ、そうよ」

「そんなの見たことないよね」

「ええ、気持ち悪いわよ」  
皆口々にこう言うのだった。  
「あんなのって」  
「何なのかしら」  
「わかったよ。じゃあその妖怪は何とかできるよ」  
博士は確かな声で皆に告げた。  
「これでね」  
「！？何かわかったの？」  
「これで」  
「うん、僕の記憶に間違いなければね」  
そしてこうも皆に語った。  
「これで大丈夫だよ。話は完全に解けたよ」  
「何かもう推理小説みたいだけれど」  
「大丈夫かしら」  
「大丈夫だよ。場所は神社だよね」  
「ええ、そうよ」  
「街の東の外れのあそこね」  
「あの神社」  
場所についても話される。  
「あの神社だよ」  
「あそこに出るのよ」  
「出るのは夜かな」  
「今度はある時間だった。」  
「そうだよね」  
「私部活の帰りに見たわよ」  
「俺塾の帰り」  
「私お母さんと犬の散歩してたら」  
皆それぞれその時何をしていたのかも語る。だがどちらにしろ時間帯が同じなのは確かだった。つまり夜というわけであるのだった。

## 第二章

「出て来たのよ、神社の前にね」

「そうそう、鳥居のところに」

「もうぬうつて」

「場所もわかったし。それじゃあ」

博士はこのことも聞いて顔に浮かんでいた確信をより深いものにさせた。

「行こうか、今夜」

「今夜つて？」

「その神社ね？」

「だから。話の謎は解けたから」

すつきりとした、まるで御馳走を食べ終えたような顔での言葉だった。

「もうね。完全にね」

「その妖怪を退治できるの？」

「そういうこと。じゃあ僕は行くから」

また行くと言うのだった。

「ついて来たい人は来て。それじゃあね」

「どうする？」

「行く？やっぱり」

「そうする？」

その妖怪を見た面々は顔を見合わせて相談する。やはり怖いのは確かだがどうなるのか見てみたいという好奇心もあった。それに博士だけ行ったらそれこそ何があるかわかったものではない。そうした様々な理由から彼等も行くことにしたのである。そこに怖いもの見たさの面々博士が心配な面々も集まって数はかなりのものになった。夜に制服の学生達がぞろぞろと歩くのはかなり異様だったがそれでも皆神社まで行った。先頭に行くのはやはり博士だった。

「本当に大丈夫なの？」

「博士、相手は妖怪だけれど」

「だから大丈夫だって」

博士の皆への返事は変わらない。

「その妖怪が何か僕にははっきりとわかってるしね」

「そうなの」

「そうだよ。それに」

「それに？」

「こんなに皆いたらね」

ここで後ろを振り返る。そこには皆が集まっている。クラス一つ分は来ている。夜の蛍光灯に照らされそこにぞろぞろとついて来ているその光景は異様と言えば異様なものであった。

「怖くないし。皆もそうじゃないの？」

「まあ確かに」

「皆いるし」

「心細くはないわね」

やはりこれは皆も同じであった。

「やっぱりね。皆がいたら」

「怖くないものなのね」

「僕もそうだよ。皆がいるから」

「怖くないの」

「そういうこと。それじゃあ」

「ええ」

「いよいよその神社よ」

見れば問題の鳥居が前に見えていた。その側の電柱の灯りにより上からぼんやりと照らし出されている。その光景は如何にも何かが出るといった風景であった。後ろに続く山を利用して造られた神社の石の階段と鳥居の左右の木々が不気味さを余計に演出していた。

「あそこにね」

「出るのよ」

「いきなり出て来るから」

見た面々が博士の後ろから彼に説明する。

「本当にぬうって」

「幽霊みたいに」

「そうなの。じゃあ」

博士は彼等の言葉を受けたうえでさらにその鳥居に近付いた。

「あそこにね。行くよ」

「勇気あるな、おい」

「そうよね」

皆別に怖がる様子もなく平気な顔で鳥居に向かう博士を見て囁き合うのだった。

「出て来たら何をされるかわからないのに」

「今のところ皆無事だけれど」

「だからそういう妖怪じゃないから」

そんな皆にも相変わらずの調子で返す博士だった。

「大丈夫なんだよ」

「そこまで言うのならね」

「まあそれでも」

「一人で行くよりは」

こう言って皆足を踏み出した。

「皆でね」

「行こう」

「皆一緒に来てくれるんだ」

博士は自分の後ろについて来てくれる皆の姿を見て微笑むのだった。

「有り難うね」

「乗りかかった船よ」

「そうそう」

皆何故かここではわざと澄ましたような顔になって言うのだった。  
心配とかそういうのじゃないからね」



「そこところは勘違いしないで欲しいな」

「わかったよ。それじゃあ」

「ええ」

「皆でね。行きましょう」

微笑んでいる博士に対してまた告げる。こうして博士は皆と一緒に鳥居の前まで来る。鳥居は近くで見てもやはり不気味なものがあった。薄暗い蛍光灯の灯りがそれをさらに増したものにさせている。そして博士がその鳥居の前に立つと。いきなりその後ろから出て来たのだった。

「げっ」

「やっぱり出て来た」

皆その妖怪を見て真っ青になる。見れば確かに江戸時代のお嫁さんの服を着て角隠しまでしている。目と鼻がなく眉も剃っている。そしてその歯はというと。

「相変わらず黒いし」

「気持ち悪いなあ」

そうなのだった。やはり歯が黒いのだ。皆それを見て顔を顰めさせずにはいらなかった。

だが博士だけは落ち着いた顔だった。そしてその顔で静かに妖怪に対して言うのだった。

「お嫁さんにしてあげるよ」

「お嫁さんに？」

「うん、そうだよ」

微笑んでその妖怪の問いに答えるのだった。

「だから。安心してね」

「そう。それじゃあ」

妖怪は彼の言葉を聞くと口元を綻ばさせた。そのまますっつと姿を消してしまっただった。

「消えた!？」

「消えたわよね」

「ええ、間違いなく」

「完全に消えたね」

皆妖怪が完全に消えてしまったのを見て口々に言い合う。そのことがとても信じられないといった様子だった。

「どういうこと？これって」

「さあ」

皆にはそれがどうしてなのかさっぱりわからなかった。

「お嫁さんにしてあげるって言われただけなのに」

「どうして消えたの!？」

「しかもあんなに落ち着いた顔で」

「あれはね。お齒黒べったりっていうんだよ」

博士がその驚くばかりの皆に対して言ってきた。

「あの妖怪はね。そういうんだ」

「お齒黒べったり!？」

「それがあの妖怪の名前なの」

「そうなんだ。お嫁さんに行けないで死んでからその恨みと悲しみでね」

「妖怪になったの」

「そういうこと。だからあの格好なんだ」

こう皆に説明するのだった。

「昔のお嫁さんの格好だね」

「そうだったんだ」

「けれど」

「けれど?」

「あれ何なのかしら」

ここで女の子の一人が言うのだった。

「あの齒は」

「そうよね、あの齒」

「真っ黒じゃない」

皆は妖怪のことがわかってから今度はあの真っ黒い齒のことを話

す。それがとにかく不気味で気持ち悪くて仕方がなかったからだ。

### 第三章

「あれは何なの？」

「人間のやつなの？あれって」

「あれはお歯黒っていうんだよ」

博士は穏やかに笑って皆に説明してみせた。

「あれはね」

「お歯黒！？」

「何それ」

皆そう言われてもわからない。また首を捻るばかりだった。

「どっかで聞いたような気がするけれど」

「何なのよ」

「歯に塗る塗料でね」

博士はそんな皆にこう説明するのだった。

「そこに塗ってね」

「ええ」

「それで？」

「それで結婚しているってことを示していたんだ」

江戸時代のこの風習のことでもまた皆に教えるのだった。

「昔はね」

「ああ、結婚指輪みたいなものね」

「眉を剃っていたのもそうだよ」

同時にこのことも皆に説明する。

「それもなんだ」

「ああ、だから眉もなかったんだ」

「成程」

その理由もわかりあらためて頷く皆だった。だが謎はまだ残っていた。

「けれどね」

「どうしてあの一言で消えたの？」  
先程の博士の言葉について尋ねるのだった。  
「博士がお嫁さんにしてあげるって言っただけなのに」  
「どうしてなの？」  
「あれはね。あの妖怪の特徴なんだ」  
「特徴なの」  
「ほら、ずっと結婚できなかったじゃない」  
またこのことを皆に話す。  
「結婚したかったのに。だからああ言うとね」  
「満足するのね」  
「それで消えるんだ。簡単でしょ」  
「わかってしまえばそうだけれど」  
「それでも」  
それがわかっててもどうにも釈然としない皆だった。  
「怖かったわよねえ」  
「そうよ。とつても」  
「何かと思っただよ」  
顔を顰めさせて言う皆であった。  
「妖怪なんて出て来たから」  
「妖怪って言ってもね。対処する方法はあるから」  
「大丈夫なんだ」  
「そうだよ。何でもさ、対処の方法はあるから」  
皆に対して述べる博士だった。  
「妖怪っていつても怖がる必要ないんだよ」  
「そうなんだ」  
「妖怪でも」  
「そういうこと。じゃあ話は解決したし」  
微笑んで皆に告げる博士だった。  
「帰ろうか」  
「う、うん」

「それじゃあ」

予想もしない程あっさりと終わってしまった話に呆気に取られる  
一同だった。だが博士だけは意気揚々とにこやかに帰路につくの  
だ。妖怪といっても対処の方法はある。特に怖がることはない、  
博士の最後の言葉だけが妙に一同の心に残ることになった。

お齒黒べったり

完

2008・11・12

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8419f/>

---

お齒黒べったり

2010年10月8日15時43分発行